

賈平凹『廢都』について

塩旗伸一郎

(一) 評価をめぐる問題

話題を呼んだ1993年の長編小説の中でも、賈平凹『廢都』（《十月》93年4期）は文芸界にとどまらない広範な社会各層の注目を集めただけに、毀誉褒貶入り乱れての論議もひときわ賑やかであった*1)。その特徴は「良いという者は褒めちぎり、けなす者は“流氓”呼ばわり」*2)というものである。そうなった理由は多々考えられる。いわゆる性描写が最大の物議を醸したことは確かだが、作者自身、「多くの角度から叙述する」という創作方法を採用、多様な読みと論議の喚起を半ば意図したことも一因である。さらに、これまで長く賈平凹の文学に親しみ、強い愛着を抱いてきた読者ほど困惑もしくは失望を禁じ得なかったという事情も、この作品への評価のギャップを大きくした。このことは、賈平凹がこれまで歩んできた創作過程の中に『廢都』をどう位置づけるかという問題の検討を迫るものである。

小論は主としてこうした視点から『廢都』を捉え直し、今日の中国文学において『廢都』にしかるべき座標を与えることを目指したものである。中国では、日本でも報道された罰金、回収、映画化禁止などの圧力があつた後、一時期の“炒風”は鳴りを潜め、「市場経済下における市民の低俗な覗き見趣味への迎合」*3)の類いが公の場での常套句となつた。《文芸報》は名指しを含む批判を相次いで掲載し、作協工作会議など一連の講話で「文学創作を単なる商行為と見なし、低俗な題材を平気で選ぶ」「少数だが影響力の大きい」*4)作家の存在が一様に指摘されるに至って、この作品への公式の評価はほぼ確定したと言ってよい。一方で、性急な評価は差し控え、歴史の判断に委ねようではないかとの主張も説得力を持って現れている。本誌第9号で黄修己氏が指摘するように*5)、その種の発言に比較的見識の高いものが多いのも事実だが、やはりこの立場は中国人なら誰しも素養として具えていることが求められる賢明さであると読むべきだろう。われわれはそれに倣う必要はないし、そうすべきではない。歴史が将来において新たな答えを見出し得るのは当然である。むしろだからこそ、今われわれが正当と考える評価を提出することはわれわれの責任なのだと思う。

私は、『廃都』は生まれるべくして生まれた小説であると考え。非難の多い性描写や言葉の問題、作家荘之蝶の類廃ぶりも含め、『廃都』はこう書かれなければならなかった。「生まれるべくして」という意味は、中国・西安という空間における今日の時代状況がその誕生を促したという面ももちろんある。だが何よりも、作家の創作生涯にとってそうである。

そのことを以下いくつかの点に即して見ていきたい。

(二) 性について

『廃都』に対する非難は大方その性描写に集中している。上に挙げた公式の評価はいわば文学外の問題として除外するにしても、内容も表現も新味がなく、作品の品位を低めているだけだとする内在的批判も強い。実際、多くの読者にとっては、性をあからさまに描くこと自体の当否よりも、むしろ「多すぎる」「しつこすぎる」描写や、荘之蝶が次々と別の女性といとも簡単に関係を持つことに対する生理的反発、また例えば『チャタレイ夫人の恋人』のような「美」の追求が感じられないままに“□□□”*6)が執拗に現われることに辟易するというのが率直な印象ではないだろうか。

『廃都』が剔出しようとした「文化」は、一切の外衣を剥ぎ取った後の人間の行動にこそ最も鮮烈に表われているという説明はわかる。しかしそれにしても、性でなければどうしてもいけなかったのかという思いは残る。この問いに正面から「その通り」と断言した論評はあまり見当たらない。だが「性描写ばかりに目を奪われてはならぬ」といった主張からは、どちらかと言えばやや腰の引けた印象を受ける。

一体、荘之蝶は何故かくも次々と、いとも簡単に性関係に陥らなければならなかったのか。そして作者は何故ここまで微に入り細に入った描写を書き込まなければならなかったのか。やはりこの問題を考えるためには、かつて李書磊が“青山、秀水、皎月、少女”*7)と定式化したような賈平凹の小説世界の特徴と変遷、その中で性の性に対する探求を跡付けてみる必要があるであろう。

若き日の賈平凹の作家としての真価を“多転移、多成效”*8)に見出したのは彼の西北大学時代の師である費秉勳であった。事実、多くの人々が認めるところの弛まざる自己克服と研鑽により、賈平凹の作風にはこれまで幾つもの重要な変化や発展が表われている。特に1983年の「商州の発見」とも呼ぶべき創作態度の獲得は、その後の代表作の数々とさらなる探索を生む一大転機となった。長篇『浮躁』(《收穫》87年1期)以後は、既に明瞭となっていた中国の伝統文化に対する探求の色彩を一層濃くしていく。だが、どの段階にも原点としての「美の創造」は一貫して流れていたと言ってよい。

『廃都』の性描写に対する非難は、それとのあまりの落差に因るところが大きい。だが、「一点の美も見出せない」ことを以て『廃都』を非難することは

木にしき女ヨにつつか。そもそも『廃都』は「美の創造」の延長線上で捉えることができるのだろうか。「落差」はここから生じた。

賈平凹の小説における性の描かれ方を遡ると、初期の作品では、村の書記などのために女性の安全が脅かされたり実際に暴力的被害に遭ったりすることはあっても、その元凶は特定の他者の内部にしか存在しないものだった。『廃都』で、家政婦柳月が荘之蝶の描く人物について、女は菩薩の如く美麗善良、男は木訥として心では女に強い憧れを抱きながらついに指一本触れられないのは、荘の性的コンプレックスを示すものだと分析するくだりがある。これはそのまま『天狗』（《十月》85年2期）などを典型とするこの時期の賈平凹自身の小説の特徴である。元凶が実は万人に具わり、自分自身にも潜む「美を脅かす存在」として意識されるようになるのは85～86年頃である。まず『黒氏』（《人民文学》85年10期）、『古堡』（《十月》86年1期）などでそうした存在が頭をもたげ、『浮躁』では初めて内なる“醜”として或る忌まわしさを以て自覚されるに至る。続く長篇『妊娠』に収められた『龍巻風』（《人民文学》86年12期）、『瘡家溝』（87年2月作）には、『廃都』で趙京五が開陳する「花は植物の生殖器」説が見え、女性器の形状への連想から付けられた地名“瘡家溝”は『油月亮』（《鍾山》88年2期）にも登場する。創作動機としても性は重要な位置を占めるまでになる。後に長篇として自選集に収められた『遊山』の各篇（90年）では再び「ついに指一本触れない」形象が現われるが、もはや“醜”としての性に対する無自覚への逆戻りではない。それを象徴するかのようになり、五魁や白朗が手を触れなかった女人たちは、触れないという彼らの非行為を直接の契機として死の淵へと追いやられるのである。

92年、『商州初録』（《鍾山》83年5期）と、その旅の終点、秦、豫、鄂三省の境界“白浪街”を舞台とした少女小月の物語『小月前本』（《收穫》83年5期）に端を発した「商州系列」は、西安側への出口である『仏関』を最後に幕を閉じる。その末尾で「私」の口から語られる“醜能避邪”は、商州系列において終焉に向けて発展してきた美と性との最終的に両立し難くなった関係を締め括る言葉だったと考えられる。『浮躁』の大洪水による破局を匂わせたラストは、この日の到来を予測していた節がある。また、『廃都』に先立って書かれた中篇『廃都』（《人民文学》91年10期。95年3月《賈平凹文集1》浮世巻では『遺石』と改題）の主人公匡子は、幾つかの点で小月を彷彿とさせるが、小月にとっての門閥と類似する“小狗王”九強によって妊娠させられながら、あえなく捨てられたことを知り、進退谷まったまま、物語は突然すべてを放り出すように終わっている。この事実は、豊富多彩な女性形象を生み出した商州系列の造形力を再び獲得するためには、美と性あるいは醜と性との関係の根本的な再構築が避けられないことを強烈に示唆するものである。

『廃都』はこうした経緯の上に誕生したものであった。

注意すべきは、賈平凹にあって性への探求と“文化尋根”の過程が時期的にほぼ重なることである。『小月前本』の終曲近く、門門の操る筏で丹江を下りながら、小月の心は“遠去”と“回帰”という二つのベクトルの間で揺れる。そしてついにその答えを口に出さぬまま、作品は終わっている。だが小月が自らの性向により近い一方を選んだ場合に予想される村人たちとの相容れぬ関係を、書かれぬことが予定された“後本”という形で残した時、賈平凹は村という集合体に凝縮的に表われる「文化」としての道徳との間で一つの課題を抱え込んだのである。だから、その後の作品で描かれる男女の間柄はみなどこか反道徳の色彩を帯びていた。『廢都』において、高級文人である荘之蝶が、神聖な人民代表大会の宿舎で、また文化サロン「求缺屋」で、あるいは「静虚村」の境地が具現しているはずの書齋で、唐宛児らと繰り広げる乱行は、「欲望の全面開放」ととどまらず、こうしたことの延長上で捉え直される必要がある。

(三) 文化への凝視

賈平凹の“文化尋根”の軌跡を考える際、文化の主たる担い手である民衆への共感ならびに隔絶感に裏打ちされた作家の自覚と、それに支えられた創作態度の獲得が出発点に置かれなければならない。これらは『鬼城』（《花城》83年1期）にその萌芽が見え、『商州初録』において本格的に確立されたものである。

『商州初録』は旅行記の形を取っているが、旅をしているのは作者ではなく“旅人”である。そしてしばしば使われる“你”が想定しているのは読者である。『初録』を手にした読者は誰でも“旅人”にいざなわれて商州各地を歩き、“旅人”の体験と観察を通して商州の山水、名月、人々に出会うことが可能である。

第一篇『黒竜口』の冒頭、西安から商州行きのバスは雪のちらつく関中平原を進んで行く。

偶尔里，便見一只野兔子狠命地跑窜起来，“叭”地一声，兔子跑得無踪無影了，捕獵的人却被槍的後座力蹬倒在地上，望着槍口的一股白煙，做着無聲的苦笑。（自選集6 散文卷《閑人》244頁）

ふと見ると、野兔が一匹、一目散に逃げて行く。「パーン」と一発音がするや、兎は影も形も見えなくなった。撃った狩人の方が反動でひっくり返り、銃口から立ち上る白い煙を見上げて、声もなく苦笑いを浮かべる。

なぜ“無声”なのか。ここに述べられているのは、読者が“旅人”の目や耳を通じてガラス越しに見た、聞いた、あるいは聞こえなかった窓の外の世界のすべてである。『商州初録』全篇を貫く、読者を作品世界に引き込んでいく力

は、この“旅人”の目の存在に負うところ大である。そして作者にとって一枚のガラスの意味するものは、観察眼の獲得ということであった。それはまた、“你是学過習的？”（《閑人》253頁）との意表を突く言葉で山の民から信頼を置かれる「作家」としての自覚と切り離せないものである。「商州の発見」という時、私はこうした“観察人”としての視線と創作主体の確立をその主たる中身と考えている。

ところで“観察人”はその後、『古堡』の映画監督、『浮躁』の視察員などの形でしばしば小説に顔を出している。これらの人物は上に述べた意味で作品の質を支えた功績は小さくないものの、その登場の仕方は多くの場合“哲理”調で、作品の完成度にとってはマイナス面が目立っていた。

この点で『廢都』は新たな境地を見せている。一つは“観察人”と主体の一体化である。莊之蝶の眼差しは彼の心を投影し、その光は独特な深みや片隅に達する。作者の筆は、城壁の下で手淫をする男に莊が自らの影を見る場面のような“醜”への観察の一方で、「見る」あるいは「聞く」という非動作的行為そのものに新たな美の創出を賭けたように見える。例を挙げるならば阿燦との別れである。阿燦自身は典型的な商州世界の女である。“浮躁之氣”を持つ半面、『浮躁』の石華、『商州初録』の小白菜など商州系列の女たちの真面目を具えている。莊之蝶は西京に設定された異空間「普濟巷」で阿燦と結ばれる。その阿燦が別れを覚悟しつつ、莊の子を宿すために再度関係を持った後、二度と逢わない決心の証としてかんざしで顔を傷つけ、黒インクを染み込ませる。予期せぬ事態に床にへたり込んだ莊が立ち上がろうとするのを制して、阿燦は決然と身を翻し、階段を下りていく。阿燦が一段下りる度にトンという足音が響いた。莊はその音を全部で78回聞いたとある。「美の創出」ということの基準を「崇高」*9)に置くとすれば、阿燦の去り方は崇高と言えらる。この種の崇高は商州系列で賈平凹の得意としてきたところである。だがここでの叙述は、足音を最後まで聞き届ける莊之蝶に一層の重点を置いている点がこれまでと違っている。同様のことは編集長鍾唯賢の死に際し、鍾が口から血を吹き出し、血しぶきを花びらのように浴びた顔がしばし痙攣した後、笑みを浮かべ、その笑みのまま固まっていくのを傍らで一人じっと見つめる莊之蝶にも当てはまる。

こうした新たな特徴をもたらす転機となったものは何か。「商州の発見」の場合はそれに先立つ散文執筆の实践があった。今回はやはり病という現実が観察の目と心を一層研ぎ澄ますのに大きく作用したものと考えられる。「廢都意識」発見の原動力となった「文化への凝視」はここから生じたものである。もう一つは西安という都市を一時的に離れたことであろう。後記に言う。「この本でこの町を書こうとした時、この町にはそれを書くための机一つなくなっていた」。「商州の発見」が商州を離れた後の新たな接近から可能になったよう

に、これは西安に二十年住みながら都市を書かなかった賈平凹が今回初めて都市を舞台とした作品を書いた事情の一端を説明するものであろう。

もう一つの新境地は、“観察人”を三分して形象化し、かなりの程度成功していることである。そのうち二者は荘之蝶と孟雲房である。荘は絶えず何物かに脅えている。それが何であるかは彼自身にはわからない。だが脅える自分には気がついて「覚醒者」である。意識の上では絶えず脱出を志向しつつ、「不本意」ながら、しかし実際は居心地の良い“假文化”圏の中に身を置き、ついにそこから抜け出せず、耽溺の途を転げ落ちる。読者は荘之蝶の放埒な行動に驚き、戸惑いながらも、時々荘に共鳴し、身につまされ、読み進むうち、ようやく気づいた時には彼がとうに精神的変質と瓦解への不可逆点を越えていたことを知るのである。それはいつだったか。ちょうど半ば頃、牛月清の不在に孤独を感じ、唐宛児との性生活に逃れるが、退化と減びの予感から唐にしほし別れを告げ、執筆場所を求めて町を出て行くところである。ただこれは後から考えて初めて思い当たることである。章段のない構成はこの効果を高める上で一役買っている。孟は世俗に対して百パーセント妥協的であり、荘にも常に妥協を勧める。隔絶感などつゆほども持っていない。一方で荘の本質を最も鋭く見抜き、遣り場のない荘の苦悩を恐らく最も親近感を持って推し測れるのも孟である。二人は“关系是死死的朋友”であり、“入世”志向の孟と“出世”志向の荘とは、私見によれば孔孟一老荘という伝統的な中国知識人の生き方の表裏を為すものである。残る「一人」は終南山から都会に連れて来られた「哲学者」の牛である。牛が「廢都意識」に対置したものは「農民意識」と「宇宙意識」である。「廢都意識」とは何か。私なりに解釈すれば、迫り来る破局に無自覚なまま、既に假“文化”ならぬ“假”文化（文化が偽なのでなく偽が文化だということ）と化した都市の行動様式に漬かったまま崩壊に至る精神の在り方のことである。賈平凹は「西安は中国の典型的な廢都である。広げて考えれば中国は地球全体から見た廢都であり、地球はまた宇宙の中における廢都ではないか」と述べている。廢都である以上、そこに住む人間は永遠に気づくことができない。だから牛が代弁するという処理は私はあまり高く評価しないが、こうした思考の枠組みによって『廢都』が歴史的価値を備える条件が作り出されたとは言えるだろう。88年、モービル文学賞受賞作に『浮躁』を選ぶにあたり、劉再復は「賈平凹は今後より一層、民族に対する思いやりと人類全体に対する思いやりを結びつけ、民族を抱きしめる時は人類をもしっかりと抱きしめ、郷土の人民の運命に対する思索の中で人類の運命に対する思索を深めることができる」と信ずる^{*10)}と予見していた。今日、賈平凹はまさに劉の示した道に沿って進んでいるように見える。この二人の文学者は境遇こそ内と外で隔たっているものの、民族や人類への“關懷”、文学に向き合う態度、そして何よりも希望なき現実への透徹した認識とそれでもなお最終的に絶望と訣別する思想

的強靱さにおいて決定的な共通点を持つ。私は『廢都』の持つ最大の価値もその点にあると考えるものである。

(四) “尋根”の発展

“文化尋根”華やかなりし頃、「商州系列」はさしあたって代表的な成果として挙げられることが多かった。今日、流派としての“尋根文学”はその歴史的役割を終えたことになっているようである。だが、もともと韓少功『文学的“根”』をきっかけとした“尋根”ブームに先立つこと二年、「商州の発見」および『商州初録』の発表に始まる賈平凹の探索は、文化素養上の研鑽、「新筆記体」から語り手の顕在化を伴う「白話」手法の応用と発展、そして「大散文」の提唱に至る数々の文体開拓、散文創作から発した観察眼の獲得と主体との一体化の試みなど、どれも中国の文壇において独創的かつ先駆的な試みであった。“尋根”の代表例に挙げられた時すでに、賈平凹の小説は挙げた側の予想を超えて、その後の創作を決定づける要素を内包していたのである。

*註

1) 実際に「入り乱れ」た論議が許されたのは初めのうちだけであった。(賈平凹『ある対談』。94年11月太白文芸出版社《坐仏》所収)

2) 白燁への書信。「語り尽くせぬ『廢都』」(《当代作家評論》93年6期)。以下、中国語からの引用は“”で示す。

3) 張炯「90年代の我が国文学の針路と選択を論ず」(《学習と探索》94年3期)

4) 翟泰豊「われわれの偉大な時代に恥じない文学作品の創作に努力せよ」(95年2月22日)。「低俗な題材を平気で選ぶ」作家はいくらでもいるが、「少数だが影響力の大きい」となると対象は自ずと限られてくる。

5) 「放蕩的嚴肅，嬉笑的悲哀——關於《廢都》的評價問題」。

6) 空欄は商業的発想によるトリックで、もともと原文はなかったとする憶測が後を絶たない。削除は作者自身の手で、さらに《十月》の編集責任者田珍穎によって行われた(前出『ある対談』、田珍穎『廢都に関する通信』など)。

7) 『青春時代の詠嘆』(《当代文学研究叢刊》六)。『廢都』について李は『現代人格の淪喪』(《学習》93年12期)で、賈平凹は「低級趣味の通俗作家に変貌した」と断じ、「生命の苦難の中でも唯一わが魂の安らぎとなることのできる本」(後記)との述懐を「真実だ」と信用した上で、「却てそこに魂などないことがわかった」と酷評している。

8) 「『臘月・正月』後記」(85年6月、北京十月文芸出版社)

9) 黄子平、陳平原、錢理群『“二十世紀中国文学”を論ず』(《文学評論》85年5期)。

10) 「『浮躁』の成功点」(《瞭望》88年5期)